

アンコール王朝の鉄生産 -非農業民が支えたアンコール-

目次

はじめに

1. アンコール王朝の鉄生産

1-1. 真臘風土記に見る鉄の利用

1-2. 誰がアンコールの製鉄を請け負ったか

1-2-1. 『真臘風土記』に見られる「野人」

1-2-2. 「野人」はどこに行ったか

1-2-3. 東北タイの製鉄

小結

2. 日本の鉄生産

「村の鍛冶屋」

2-1. 古代 導入と伝播

2-2. 中世 遍歴する職人

2-3. 近世 たたら製鉄

2-3-1. 野だたら

2-3-2. たたら製鉄の発展

2-3-3. たたら製鉄の工人集団と操業

小結

3. 王権と職人

3-1. 聖と俗という視点から

3-2. 漂泊者としての職人 彼らはどこに行くのか

少数民族とサンカへの視点

結論

註

文献目録

池上真理子

カンボジア語、4年、7902094

はじめに

アンコール王朝とは一体どのような国家だったのか？

インドシナ半島において9世紀から14世紀の間存在したこの王朝については、これまで主に美術史や建築史の面において議論がなされてきた。例えば美術に関しては、ヒンドゥー教、仏教、その他民間信仰といった宗教に彩られ形づくられてきた彫像や彫刻が時代ごとに区分されている。また建築に関しては、これまで発見された王の碑文や構築物の構造の解析をもとにある程度の建築年代が割り出されてきた。

アンコール王朝の経済を水利都市論が今もなお有力な説とされている。その説はもともとジョルジュ・セデスより端を発し、グロリエによってさかんに強調されてきた。これはトンレサップ北岸地域に現在も利用されている西バライやもう水が枯渇してしまった東バライといった巨大な長方形の灌漑施設が残っていることに基づいている。また現在のカンボジアにおいても、都市部住民よりも地方で生活する農民のほうが圧倒的に多いことが、水利都市アンコールという構想を助けている。

しかしながらアンコールの姿はそのように一様なものだったのだろうか？いやそんなはずはない。最盛期にはインドシナ半島全域に及んだアンコール王朝の領土全てで、同じ生活が行なわれていたとは到底考えにくい。地域ごとにそれぞれの生態環境に見合った生業がなされてきたに違いない。海や川、湖に面した地域では漁業に携わる人のほうが農民の数を上回っていたことも考えられる他、中国やクメールの交易商人が国内外をさかんに行き来していたに違いない。『真臘風土記』では宮廷や役所で働く肌の白い外国人の女官の姿も見られる。さらに市場における女性の活躍が記されている。現在もシェムリアップの市場を歩き回ってみれば、元気に野菜や魚、雑貨を売っている女性の姿がある。よく行商のおばさんが棒で吊った籠を肩にかけて、手作りのお菓子やごはんを売り歩いているように、アンコール王朝の市場を出て自らが作り出したものを売りに出かけていた人々もいただろう。アンコールワットなど現在も残るアンコール遺跡群の積み上げられた石材の量とその大きさはすさまじく、内部や外部に彫られたレリーフの様は均一ではなく、丹精を凝らして完成されたものもあれば、中には稚拙な技術も見られるのである。レリーフを施すために集結した職人や、寺院の建造のために山地から無数の石材を切り出す石工たちが大勢いた証拠である。このように、人々は寺院に安置された仏像や留め置かれた彫刻のアプサラのように無言でいた訳ではない。現在のカンボジアの風景と同様に、人や物はさかんに国内外を動き回っていたはずである。

アンコール王朝はどのような国家であったのか？

アンコール王朝時代はしばしばカンボジアの”栄光の時代“として捉えられてきた。碑文解読に加え、寺院建築や宗教美術など王や貴族といった富裕層が中心となって作りあげた文化を元に「アンコールの栄光」は、近代から現在に至るまでカンボジア国内、国外双方で強調されてきたのである。特に2003年に首都プノンペンで起こったタイ大使館襲撃事件の要因や、1930年代に宗主国フランスからの独立するため、民族意識の向上にアンコールが用いられたこと、さらに1954年からポル＝ポト時代を経て現在まで国旗にアンコールワットが途絶えることなく記載されているなどの点に注目すると、近現代においてはアンコール王朝がナショナリズムに利用されている面が多々見られた(山崎 2004)(笹川 2000)。またアンコール遺跡群が世界遺産に指定されたことで、外国人が大挙してやって来る中、観光事業は国家財源獲得の重要な要素となっている。だがアンコール遺跡の世界遺産認定は、それまで遺跡公園として管理されるようになった地域で暮らしていた住民が、森林伐採、狩猟、漁猟の禁止など生活の上での厳しい制限を受けるようになるという弊害を生んだという(田代 2001)。住民はそれまでの生き方を転換せざるをえない。このようにカンボジアの文化資源を守ろうとするあまりに、カンボジアの人々が隅に追いやられる場合さえあるのだ。だが、そのようなことは許されるべきことなのだろうか？

ここに「誰のためのアンコールなのか？アンコール王朝に生きた人々はどのような暮らしを送っていたのだろうか？」という一つの素朴な疑問がある。

これまで現代のわたしたちに、唯一自ら主張を行ってきたのは、碑文や外国人の歴史書に名が残る歴代の王ばかりだった。一方でアンコール王朝に生きていた人々は長い間沈黙を守ってきた。そしてわたしを含めた多くの人々もまた現代に残された華麗な王朝文化に目を奪われるばかりだった。アンコール王朝の歴史はこれまで人を語ってこなかった。わかっていたことは、王が階級の一番上にたち、その下に王族、貴族、官吏といった人々が続き、農民、商人、奴婢が続くといった程度だった。では、アンコールの人々は、民衆は、本当に非支配階級としての立場にただ甘んじるだけだったのだろうか。階級上はそれに甘んじることはあっても、したたかに生きていたと考える方がより自然なのではないだろうか？そこでわたしはこれまでアンコールについて残された史資料の他、従来調査されてこなかった分野の開拓を行っていく

ことで、アンコール王朝を支えていたのは、多くの民衆であったということを証明したい。

アンコールと民衆の姿を新たに捉え直す。このような立場に立って、以下に続く本文において、わたしは持論を展開していきたい。その材料としてわたしは「鉄」を利用していく。何故鉄なのだろうか？鉄は時に農具として、その国、地域を發展させ、時に武器として自衛や領土拡大の手助けをしたのである。一時は広大な領域を支配したアンコール王朝もまた例外ではない。整然と積み上げられた無数の石造りの寺院の存在や隣国との争いの事例から、アンコール王朝での工具や武器、そして農具として鉄の利用はほぼ明らかである。

その説をより詳しくするためには、第1章では13世紀のアンコール王朝を記録した『真臘風土記』、ドラボルトの『アンコール踏査行』、19、20世紀前半のフランス語文献、東北タイでの発掘・民俗調査事例といった史資料をもとにアンコールと鉄の関係を探った。注目した点は鉄がどの程度広まっていたか？誰が製鉄を行っていたか？さらに王と職人がどのような形で結びついていたかについてだった。『真臘風土記』では、アンコールにおける鉄の普及の度合いが判明し、さらに鉄生産者のヒントを得ることができた。そこで『アンコール踏査行』、フランス語文献にその答えを求めたところ、山地民と王権の興味深い関係が明らかになってきた。さらに東北タイの調査記録からは王朝時代の製鉄技術を得ることができた。一方、研究を進めていくうちアンコールと鉄生産をさらに結びつけるには、国家と鉄、王権と職人の一つのモデルの必要があるという結論に至った。

そこで第2章では国家と鉄、王権と職人の一つのモデルを見いだすため、日本の鉄生産について調べた。日本の鉄については様々な研究者によってモデルを見いだすことが十分可能なほどの資料が残されている。研究を進めていくうちに近代に行なわれた製鉄が農民たちと全く切り離された世界で作られ、生産を行なう人々もまた特殊な存在であることがわかってきた。さらに近代から中世、古代とさかのぼって調査を進めるうちに、地域ごとに技術や集団組織についての明らかな差異が生じていることが判明した。そこでわたしは数多くの製鉄研究から特に職人の姿にさらに製鉄技術にも注目した。

第3章では、視点を変え、「聖と俗」という概念を利用し、王権と製鉄職人の関係に関するさらなるモデルを見いだした。鉄を量産するためには専門的な知識と高度な知識が必要であり、多くの場合、その導入や發展に国家や有力者が関わっていたことがわかった。またわたしたちは現代でもかなりの数の遍歴を行なう製鉄職人や鍛冶職人の姿を見ることができ、彼らは定住を続ける農民とは一線を画した立場にある。以上の2点はアンコール王朝の製鉄・鍛冶職人を再現させる有効な要素となるはずだ。

「アンコール王朝とはどのような国家であったのか？」「アンコールに生きた人々はどのような暮らしをしていたのだろうか？」わたしはこのような疑問にたち、「アンコールの鉄」に注目することで、新たなアンコール王朝の歴史を開拓したい。そして何よりも民衆の姿にスポットライトを当てたい。アンコール王朝を支えたのは、民衆である。

1 アンコール王朝の鉄生産

1-1 アンコール王朝において鉄はいかに利用されたか？

第1章では『真臘風土記』、『アンコール踏査行』、19、20世紀前半のフランス語文献、東北タイでの発掘・民俗調査事例といった史資料をもとに、アンコールと鉄の関係を探っていくという手法をとる。そのための課題としてはまず、「鉄がどの程度広まっていたか？」次に「誰が製鉄を行っていたか？」さらに「王と職人がどのような形で結びついていたか」というテーマを設定していきたい。

最初にこれまで発掘されているアンコール王朝時代の鉄製品について言及しておく。まず寺院を建造する際、石材のつなぎとして使用されたかすがいの存在が寺院における発掘調査によって明らかになっている。またアンコール寺院を建立するため石材の切り出しに、鉄の棒が用いられたことも判明している。腐食や再利用など鉄の持つ特性から発見される数こそ多くはないものの、主に工具での使用が行なわれたことが判明した。

しかしながら数の限られた遺物からアンコールと鉄との関係を描き出すことは困難に等しい。今後、カンボジアでの発掘や実地踏査の必要がある。しかしそのためには事前準備と十分な知識が必要である。そこで今回の論文で主にこれまで残されている史資料を使用することで、アンコールと鉄生産の関係を考えていきたい。1-1では13世紀のアンコール王朝を記録した『真臘風土記』をもとに、鉄がどの程度広まっていたか？について調査をしていく。

『真臘風土記』は、1294年に当時のアンコール王朝の首都を訪れた、元の役人である周達観によって記された書物である。真臘とは当時中国が呼称していた名であり、アンコール王朝を指している。真臘国の概要や出帆から入国までの情

景をつづった「総叙」から始まり、「城郭」、信仰される宗教に関する「三教」、「語言」、特産物について記された「出産」など計 41 の項目で構成されている。13 世紀のアンコール王朝の多様な姿を知るための貴重な書である。そのような『真臘風土記』においても、鉄の利用が多くされている。

例えば「船楫」で、鉄工具の使用が認められる。「大工は鋸がなく、ただ斧をもちいてこれ(木)をうがち、きり開いて板にする。」「船もやはり鉄釘を用い・・・また檳榔木の破片でこれをおさえる。」(周 1989: 72)(傍線は筆者)といったように周達観の鋭い観察力は、大工が斧によって、木を切り出していること、造船に鉄釘を使用していることを捉えている。

その用途、強度から金属によって斧が金属で出来ていたことは間違いない。そして現代に残る鉄の工具、併記されている船の鉄釘の存在から、鉄製であったことは疑う余地がないのではないか？

「国王出入」では、「新主は身に製鉄をはめ込み、たとい刀箭のたぐいが体にとどいても害をなすことができない。そこでこれを侍んで遂に思い切って外出した。余が滞在した一歳余に。その〔国王〕が外出するのを 4、5 回見たことがある。」(周 1989: 82)(傍線は筆者)とされている。王が外出する際にも鉄を身につけていたことがわかる。東南アジアの各地に製鉄信仰というものがあるという(注 1)。製鉄信仰がどのようなものか未だ知らない。今後はその点も考えていく必要があるだろう。

鉄が国王と結びつくような聖なる面を持ち合わせていることが判明する「国王出入」に対し、「奴婢」の項での鉄の利用は負の面を持ち合わせる。「〔奴婢で〕逃げる者があり、とらえてふたたびこれを得ると、必ず顔面に青色で刺(いれずみ)し、あるいは項(うなじ)の上に鉄〔の首枷〕をつけさせることによってこの〔奴隷の〕自由を束縛する。またうでとももの間に〔鉄の枷を〕つける者〔の場合〕もある。」(周 1989: 38)(傍線筆者)。ここでは奴婢への戒めに鉄の枷が使用されている。それはまるで王が威圧を行なっているようにも考えられる。

このような、鉄に「聖と俗」という 2 律背反の性格を持たせるという考え方は日本やアフリカなど世界各地にあり、必ず王権や同等の権力と結びついている。王と奴婢に共に鉄が用いられたという点から、アンコール王朝にも「聖と俗」の面がある。

「欲得唐貨」では、入手を望む中国商品の中に、一級品とされる金銀や、錫鑞や銅板といった金属器と共に鉄鍋(周 1989: 60)が見られる。鉄鍋はしばしば製塩用に用いられた。アンコールにおいて製塩がなされていたことは十分に考えられる。その証拠として東北タイでは製塩の生業がさかんである。製塩に利用される鉄鍋は鑄造品(注 2)である。中国では古代から鑄鉄の生産がさかんであった。アンコール王朝においては、自国で生産する鉄製品の他に、量産品として品質がよい、価格が適当である、といった理由から部分的に他国の製品に頼る面も持ち合わせていたのではないだろうか？

このように『真臘風土記』を利用したことで、アンコール王朝において鉄がかなり普及していたことが判明した。さらに中国からも鉄製品を輸入していたことがわかった。だが、そこにアンコール王朝の誰が製鉄に関する専門知識を持ち合わせていたのか、という疑問が起きる。そこで 1-2 では「アンコール王朝の製鉄を誰が請け負ったか？」というテーマを提示し、史資料から特定をしていきたい。

1-2 誰がアンコールの製鉄を請け負ったか？

1-2-1「野人」とアンコール王朝

1-1 では真臘風土記を利用し、アンコールの鉄の普及の度合いを確認した。そしてアンコール王朝において鉄がかなり普及していたことが判明した。しかしながら、「アンコール王朝の製鉄を誰が請け負ったか？」については、明らかな記述を見いだすことができなかった。

そこで一度視点を変え、『真臘風土記』の「野人」「出産」における記述に注目したところ、興味深い事実が判明した。

「野人」の項では、「野人に二つの種類がある。一種の、〔カンボジア人の間で〕やりとりする〔話し〕言葉が通じる野人があり、すなわち都城内に売り払われて奴婢となる類がこれである。」(周・和田訳 1989: 40)のように、山地居住の少数民族の姿を見いだすことができる。彼らは周達観により主に 2 種に分けられている。まず「言葉の通じる野人」、つまり教化されアンコール王朝に組み込まれた少数民族である。彼らは奴婢として都城に売り払われている、と周達観は記述している。一方でその権力に屈せず独自の生活様式を保っていた人々の姿が記されている。彼らの姿は、「この輩はみな居るべき家がなく、ただその家族をひきつれて、山地をめぐる行き、頭に一つの素焼きの鉢を載いて走る」(周・和田訳 1989: 40)といった言葉で表現されている。彼らは遍歴を行なう民だった。また彼らは木製の弓矢や投げやりを用い狩猟採集を行っていた。また「近くの地には、また荳蔻・木綿花をうえ、織布をもって業とする者がある。」(周・和田訳 1989: 41)

というように専門的に生業を行なう姿もあるのである。

「野人」と称された人々が、そのような世間に馴化することなく遍歴、狩猟採集といった独自の生活様式を保っていたことは、アンコール王朝の多面性を見いださせる重要な要素だ。

実際これまでアンコール王朝と民衆の関係は支配者とそれに従う人々といった図式で捉えられてきた。しかしながら、「野人」の項では「みな居るべき家がなく」「山地をめぐり行き」「一つの素焼きの鉢を戴いて走る」のように柳田國男風に言えば、“まつろわぬ人々”がアンコールの領地の中で生きていたことが明らかだ。

「出産」の項では山地からとれる産物がほとんどを占めている。上等品としてあげられているのは、かわせみの羽根や象牙、犀角、黄ロウであり、下等品では降真と呼ばれる香や荳蔻、画黄と呼ばれる松脂(周・和田訳 1989: 55)である。

「誰がアンコールの製鉄を請け負ったのか」を調べるため、『真臘風土記』を利用したところ「野人」「奴婢」からクメール民族ではない山地民の姿が明らかになった。山地民の中には“まつろわぬ人々”がいた一方、アンコールの交易に寄与していたものがいたという。その中に鉄があったことも考えられる。では、王朝が山地民を利用していたのか? いや、必ずしもそうとはいえない。それを証明するために、次の **1-2** では製鉄を行なってきたと言われている山地民のクイ族に注目する。

1-2-2 クイ族と製鉄

何故クイ族かといえば、現在もカンボジア領土内で暮らすクイが製鉄と関わりのあることが言われてきたからである。実際にいくつかの文献を調べたところ、クイが製鉄を行なっていることは間違いない。何故クメール民族ではないクイが製鉄を行なうことができたのだろうか? それはもともとクイが山地に住む古層民族であるからである。

クォイ、ソアイといった様々な名称で呼ばれるモン・クメール語系のクイ族(注 5)は、タイ・カンボジア国境の 103° E から 105° E に居住している。その人口の多数を占める 10 万人ほどはスリン、シサケット、ウボン、ローイエットといった場所に住み、カンボジア側ではコンポントム州北部シェムリアップに居をかまえている。多くのクイはクイ語と呼ばれる独自の言語の他にラオス語とクメール語を話している (Lebar, Hickey, Musarave 1964)。

近代の史資料からもクイによる製鉄が判明した。

例えばドラポルトの『アンコール踏査行』では、当時のクイ族の村を尋ねている様子が記されている。「このクイ族は、ラオスとカンボジアの境の地方に多く集団になって分布しており、それぞれが特殊な職業によって種族を分類し、その名がついている。たとえば、鉄クイ族は鉄鉱石が多い山を採掘して生き、船クイ族は丸木舟を作り、その他も同じく職業によって区別されている。」「他と離れて生活し、頑強に他種族と混交するのをきらう民族で、古くからの伝統をよく保有している。」「カンボジア人は、ある尊敬をもって彼らをあつかい、けっして奴隷の身分には落とさない。」(ドラポルト 1970: 50) (いずれも傍線は著者)

傍線部に特に注目してもらいたい。ドラポルトの記述から、クイが職能民であり、その中に鉄クイ族と呼ばれる製鉄を行なう職人集団が存在したことが判明する。彼らは定住し、田を耕すクメールの民衆とは異なり、いわゆる“遍歴”という定住せず渡り歩く生活を行なってきた。しかも種族自体もかなり特殊な立場にいた。その特殊な立場とはどのようなものか? その謎をとくヒントとして、カンボジア人がけしてクイのことを見下さなかったことがある。

他の文献でもクイの製鉄が記述されている。例えば 19 世紀後半に出版されたフランス人旅行者の旅行記の中ではたたらを踏むクイの姿が詳細なスケッチとともに記述されている(図 1-A)。また他のスケッチではピストンふいごが用いられ、その人物の隣りでは複数で鍛冶仕事をしていると見受けられる姿もある(図 1-B) (Boulangier 1880-1881)。

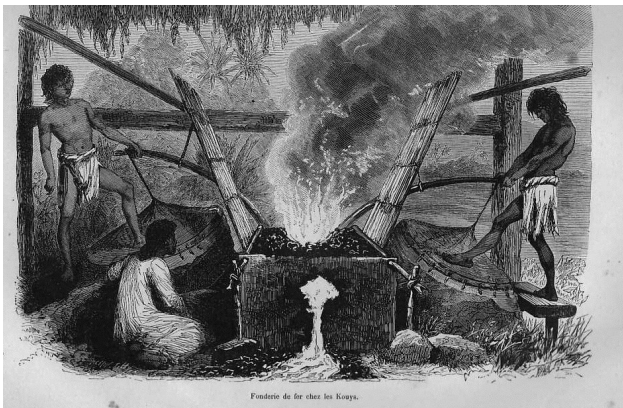


図 1-A 踏み吹子を用いて製鉄を行なうクイ

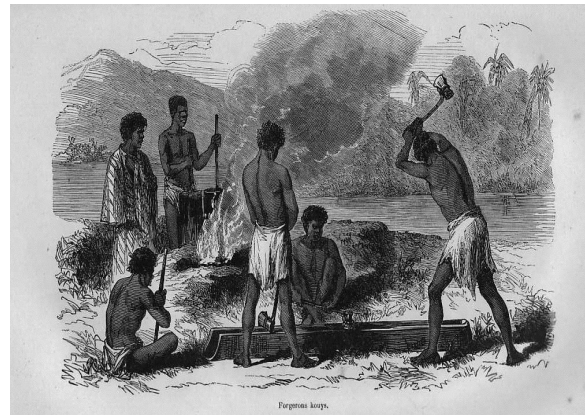


図 1-B ピストン吹子の使用(左手奥)と鍛冶
(Boulangier1880-1881: 113, 117)

このように、クイは確かに製鉄を行っていた。しかも専門的に行なう職人集団として、遍歴を行ないながら鉄鉱石のある地域を歩いていた。特殊技術を持った山地民であるクイをアンコールの王権は必要とし、重用していた。アンコールに鉄は重要だった。だからクメールの人々はクイが山地民であるにも関わらず、見下すことができなかつたし、しなかつたのだ。

山地民とアンコール王朝との関係を考えたい。周達観の記述によれば、野人は山地居住の少数民族をさしており、言葉の通じる野人は奴婢にされる。そこで「奴婢」の項に目を通してみると、奴婢は野人でまかなわれると記述されている。さらに野人はクメール人(カンボジア人)に撞(チョン)(注 3)と呼ばれていたという(和田 1983)。「彼らは小屋を作るのにカンボジア人のやるように杭を打ち込まず、樹木の上半部を切って頭を飛ばした幹の上に住居を作る。」(ドラポルト 1970: 50) チョンはクメールでは蔑みの言葉であり、ペリオの新訳を採用するならば、アンコール王朝におけるチョン族とクイ族の立場の違いは明らかである。前者は奴婢として賤別視され、後者は専門的な生業を行なう民族として一定の敬意を払われている。ペリオの解釈を参考にし、理解することができるのは、山地民はクメール人とは異なる立場にあり、その中でも民族ごとに専門集団、奴隷身分といった位置づけが行なわれていたということである。つまり野人イコール奴婢というわけではなく、ある一定の地位を手にした少数民族もいたということである。例えばクイ族は製鉄技術を持ち、鉄鉱石などの原料や炭の調達を居住する山地の中で行なうことができた。そのためクメール民族が台頭しアンコール王朝の権力が増した後も、山地民としての立場を逆に利用し王朝の生産活動や軍事力に貢献することで、奴婢身分を免れたのである。近代までクイ族が製鉄や象の調教の技術を維持してきたのも、アンコール王朝によって職能集団として立場を保障されてきたためである。

このようにクイ族はアンコール王朝の製鉄の一端を担うことに成功したのである。その生産規模は未だ明らかでない。今後クイ族の村へ踏査を行なう必要も生まれてくる。では、クイによってアンコール王朝の製鉄が全てまかなわれていたと考えていいのだろうか？いや、より広い視点でアンコールの鉄を捉えなければならない。そこで、**1-2**では東北タイにおける鉄生産を考える。

1-2-3. 東北タイの製鉄

1-2-2ではクイによるアンコール王朝の鉄生産が明らかになった。では、クイによってアンコール王朝の製鉄が全てまかなわれていたと考えるのが適当だろうか？クイの製鉄の規模については今後の研究にかかっている。一方で東北タイと呼ばれる地域において製鉄が行なわれていたことが確認されている。

そこで **1-2-3**では東北タイの製鉄に関する発掘調査、民俗調査事例を利用し、多面的にアンコール王朝の鉄生産の規模や場所を考えたい。

そもそも何故東北タイなのか？それは東北タイと称される現在のタイ領の土地がかつてはアンコールの領土であったからである。では、何故王都よりも遠く離れたこの地域に鉄生産を見いだす必要があるのか？

それは 13 世紀にアンコール王朝の領土は、最大勢力を誇ったジャヤバルマン 7 世の治世下において、インドシナ半島全域にまで広がっていたからである。王は各地に王道を作らせ、また 121 カ所の宿駅と 102 カ所の施療院を設置させた。アンコールトム(「大きな都城」=「王都」の意)から伸びた王道は南東側ではミーソンにつながりフエまで達し、あるいはプ

ノンペンを通りオケオの地に至っている。また北西側ではスリン・ブリラムを通りピマーイを抜けビエンチャン、スコータイに達している。もう一つの王道はアユタヤを抜けロップリーからスコータイあるいはカンチャナブリに至っている。このようにアンコール王朝は、王都のみでは機能できないほど、最盛期に領土を拡大させていたのである。

9世紀からプノンペンに首都が移転される時代までほとんどの時期王都としての役割を果たしてきたアンコールは政治、外交の中心地であったといえる。ではその経済基盤を支えたものはなんだったのか。一つには**はじめに**で触れているようにアンコール水利都市論を柱として稲作などの農業国家の姿が考えられている。しかしながらその論には欠陥がある。アンコール水利都市論で説明しうるのは、王による水利施設の整備と水を享受する農業民の姿である。王の権威に説明がつくものの、民衆の姿が見えてこない。さらに市場の人々、職人、漁民など様々な非農業民の存在が切り捨てられているのである。そこでわたしは鉄をアンコールの経済基盤の一つであったと主張する。わたしはアンコールの鉄生産を考えていくことで、新たなアンコールの歴史の側面を開拓するとともに、非農業民の姿を明らかにすることにした。

東北タイにおける鉄の意義を考えるとともに、アンコールとの関連を見いださなければならない。注目すべきことに、東北タイにはその環境を利用した鉄生産の長い歴史がある。東北タイは、乾燥と干ばつ、ラテライト土壌、塩分を含んだ土壌という厳しい生態環境の中で、水稻稲作の他、製塩と製鉄という生業により、前1千年紀後半から後1千年前半まで発展をとげてきた。新田氏によれば東北タイにおいて水稻農耕は紀元前3千年紀から2千年紀に開始され、青銅器が鑄造された金属器時代前期は紀元前1000年あたりから始まった。製塩も金属器時代と同時期に始まったとされている。鉄の利用は紀元前500年前後の金属器時代後期となり、製鉄と鉄器の鍛造(注3)が開始されている。そして製鉄の証拠として紀元前2世紀に利用されたバンドンブロン製の鉄遺跡が発掘されている(新田1991)。

またアユタヤ時代の製鉄遺跡(注6)や同様の製鉄工房や刀剣鍛冶工房の存在が明らかになっているのである。製鉄工房や刀剣鍛冶工房があるウタララディット県トンセンカン郡ナムピー村(Ban Nam Pheech)は「焼き入れの水の村」という意味を持つ。製鉄を行なう集落には200家族が住んでいる(新田1996)。

新田氏によれば、ナムピー村で製鉄に利用されていた鉄原料はアユタヤ時代には村内の鉱山で採掘される赤鉄鉱であったが、現在は枯渇しており採掘禁止のために、2、3キロメートル離れたかつて製鉄を行なっていた折に出て辺りに散布されていたスラグ(製鉄を行なう際に出る非金属の不純物)と呼ばれるが利用されている。スラグを拾う場所には焼土やふいご羽口破片などが散乱しており、新田氏は製鉄工房がかつてあったことを明言している(新田1996:)。ナムピー村にも製鉄炉があるが、小屋の中で鍛冶炉と隣接して造られている。製鉄炉は1m四方で、その上に高さ50cmほど粘土が積み上げられ、中央に直径20cm、深さ30cmほどの穴が設けられている。この穴に送風用の竹筒が挿入され、その先には送風装置である電動モーターがつけられている。製鉄や鍛冶に使う道具は大型ハンマー、金ばさみ(加熱された鉄を持つ際に使用される)、鉄棒(炉内をかきまぜる)、丸太と鉄の金床(鉄を鍛える際のまな板のような役割をする)がある。製鉄材料として、スラグ、木炭が使用されている(新田1996: 25)。

調査の中では、実際にナムピー村の職人による製鉄が実践され、製鉄方法の詳細が明らかになっており(新田1996:26,27)、今後アンコールで行なわれた製鉄方法を考慮する上で貴重な資料である。

ナムピー村は刀鍛冶でも有名である。鍛冶に以前はピストン吹子(ふいご)が使用されていたという(新田1996:32)。ピストン吹子はクイ族による製鉄でも利用されている(Boulangier 1880-1881)。鉄のインゴット(延べ棒)を加工し、1本の刀を作るには木炭が20kg必要であるという。鍛冶は刀匠とその弟子の2人の男性によって、大鎚で交互に打たれる(新田1996:33)。新田氏も述べるように師匠とその弟子によって行なわれるこの作業は日本と同様であり、日本においては野鍛冶と称され、しばしば農民が農業を行なわない期間を利用して農具の修理に携わっていた。つまり、技術さえ覚えれば職人でなくとも行なうことができる作業であり、アンコール王朝時代や以後の時代でも、半農半鍛冶で生計を立てていた人々の存在は十分に考えることが可能である。

新田氏の調査を日本の製鉄研究の成果と比較してみると、中世の日本で行なわれた製鉄(本文第2章参照)とナムピー村で行なわれている製鉄には共通点が多い。共に各地に散らばった小規模な製鉄炉で生産が行なわれており、職人も大規模な集団化をしておらず、出来上がった鉄塊も一度に数t単位の鉄が生産されるたたら製鉄と比較すれば、少量と考えられる。近代において日本では鉄生産の体系化がなされ、炉の規模が巨大化し、職人も100人単位の大集団となり、原料の採取から鍛冶も一括して行なう大規模な鉄生産が行なわれていた(本文第2章参照)。一方、ナムピー村の製鉄炉を含むアンコールの地やその周辺で行なわれる製鉄については、たたら製鉄のような大規模なもの存在は現在明らかでない。しかしながら製鉄や鍛冶が地域に深く根付いていたということは、東北タイに限ってみても、先史時代や王朝時代の製鉄炉、

鍛冶炉の遺跡が発見されている点、加えてアユタヤ王朝時代の製鉄技術がナムピー村に未だに残っているという事実から、確かといえる。

かつて東北タイはアンコールの領土だった。東北タイの生態環境は鉄鉱山があり、ラテライト層であることなど鉄生産を行なうのに優れていた。さらに現代にも残るアユタヤ王朝時代の製鉄法があった。そして最後に王道はアンコールの王都につながっている。日本には鉄や塩を運ぶ人々によって道が作られていった。アンコールではどうだったか？ 今後はアンコールの王道と鉄鉱山や鉄の輸送ルートとの関係を考えていく必要もある。クイと東北タイの製鉄の比重、関係性についても今後研究の余地がある。

小結

第1章では『真臘風土記』、『アンコール踏査行』、19、20世紀前半のフランス語文献、東北タイでの発掘・民俗調査事例といった史資料をもとに、アンコールと鉄の関係を探っていくという手法をとった。そのための課題としてはまず、「鉄がどの程度広まっていたか？」次に「誰が製鉄を行なっていたか？」「さらに王と職人がどのような形で結びついてきたか」というテーマを設定した。さてどこまで核心部分にまでふれることができたのだろうか？

1では「鉄がどの程度広まっていたか？」という疑問を解消するために『真臘風土記』を利用した。ここでは当時、斧、船に使われる鉄釘といった工具や王の「聖鉄」、さらに製塩用と見られる鉄鍋が中国から輸入されているなど、実に様々な形でアンコールにおいて鉄が利用されていたことがわかった。

さらに「王朝の製鉄が何者によって行なわれたか」について調べるため『真臘風土記』を利用したところ「野人」「奴婢」からクメール民族ではない山地民の姿が明らかになった。1-2では製鉄を行なってきたと言われている山地民のクイ族について調べるため、ドラボルトの『アンコール踏査行』、19世紀と20世紀前半のフランス人旅行者による文献を利用した。ここではクイ族が職能によってグループ化され、その中に鉄クイ族がいたことが明らかになった。19世紀の文献の中には製鉄・鍛冶を行なうクイ族のスケッチが見られた。20世紀前半の文献でも冬頃にクイが製鉄を行なっている様子が伝えられていた。このようにアンコール王朝の鉄生産者に山地民クイという一つの結論を見いだすことができた。また山地民と王権の特殊な関係が明らかになった。

一方でもっと広い視点でアンコールと鉄の関わりを考える必要があるという考えから1-2-3ではかつてアンコールの領土だった東北タイの製鉄に関する発掘調査、民俗調査事例を利用した。東北タイの生態環境は鉄鉱山があり、ラテライト層であることなど鉄生産を行なうのに優れており、さらに現代にも残るアユタヤ王朝時代の製鉄法があることがわかった。そして東北タイの史資料からは今後はアンコールの王道と鉄鉱山や鉄の輸送ルートとの関係という課題を得ることができた。

このように「鉄がどの程度広まっていたか？」、「誰が製鉄を行なっていたか？」、「さらに王と職人がどのような形で結びついてきたか」といったテーマを設定したことで、アンコールの鉄利用、製鉄職人の存在、山地民と職人の関係、鉄の生産地が明らかになった。しかしながら十分な製鉄技術の知識を得ることができなかった。さらに大きな目標である、アンコールと民衆の姿を新たに捉え直すという立場からより詳しく王権と職人の関係を考えていきたい。そこで第2章では日本の鉄生産について調べることで王権(あるいはそれと同等の権力者)と職人、製鉄技術のモデルを得たい。

日本の鉄については様々な研究者によってモデルを見いだすことが十分可能なほどの資料が残されている。研究を進めていくうちに近代に行なわれた製鉄が農民たちと全く切り離された世界で作られ、生産を行なう人々もまた特殊な存在であることがわかってきた。さらに近代から中世、古代とさかのぼって調査を進めるうちに、地域ごとに技術や集団組織についての明らかな差異が生じていることが判明した。そこでわたしは数多くの製鉄研究から特に職人の姿にさらに製鉄技術にも注目した。これらのモデルは必ずアンコールの鉄生産の論を発展させていく上で重要な要素となる。

2. 日本の鉄生産

「村の鍛冶屋」

1. 暫時(しばし)もやまずに 鎚(つち)うつ響き①

飛び散る火の花 はしる湯玉。

鞴(ふいご)②の風さえ 息をもつかず、

仕事に精出す 村の鍛冶屋。

2.

3. 刀はうたねど 大鎌(おおがま)小鎌(こがま)

馬鍬(ぐわ)に作鍬(ぐわ)③

平和のうち物 休まずうちて、
日ごとに戦う 懶惰(らんだ)の敵と。

4. かせぐにおいつく 貧乏なくて、
名物鍛冶屋は 日々に繁盛。
あたりに類なき 仕事のほまれ。
鎚うつ響きにまして高し。

(井上・堀内 1958: 192)

この歌詞をご存知だろうか？大正時代に発表された「村の鍛冶屋」は、文部省唱歌として長い間子供たちに歌われてきた。しかしながら、わたしは今日にいたるまでこの歌を聞く機会がなかった。小学校で配布される「みんなの歌」にも「村の鍛冶屋」が載っていた記憶はない。それもそのはず、実際に「村の鍛冶屋」が姿を消し始めているからである。

そもそも鍛冶とは何か？

鍛冶とは鉄を加工する際の技術のことである。「鍛(かじ)」は「鍛(きた)える」と読むこともできる。鍛冶は文字通り、傍線①の歌詞のように道具を使い、鉄を鍛えて鉄の内部の炭素を取り除いていく作業である。炭素を取り除いていくことで、鉄は強くなり、さらに丈夫な刀や道具に加工されていくのである。その際に鉄を炉の中で高温で熱することで変形させていく。傍線②の鞴(ふいご)とは、炉の温度を高めるための送風装置である。

では「村の鍛冶屋」とは何なのか？鍛冶屋とは、鍛冶を専門に行なう職人のことである。鍛冶屋には刀作る鍛冶屋と、農具や工具をといった道具を専門に作る鍛冶屋の2つがある。「村の鍛冶屋」に登場する鍛冶屋は後者であり、傍線③からわかるように工具や農具を製作しているのである。

今はもうほとんどすたれてしまっているが、「村の鍛冶屋」はかつて日本のどこにおいても見ることができた風景だった。歌詞からもその繁盛の様子が明らかのように、周辺の住民から多くの注文を受けていたのである。そしてそれらの大半は農具の修理、製作だった。鉄と日々の生活は堅く結びつき、鍛冶屋はその架け橋となっていたのである。

わたしたちは、もう鉄という素材を強く欲することはない。わたしたちは日頃鉄による恩恵を受けているにもかかわらず、あまりにも当たり前存在としての認識しかない。では、過去の時代において鉄はどのような存在であり、どのように生産されていたのか？鉄そのものを作り出す製鉄職人や製品を作り出す鍛冶職人の立場とは一体どのようなものだったのだろうか？さらに天皇など権力者との関係をさぐっていく。そしてアンコールと鉄生産の研究の材料となるモデルを作り出したい。

そこで第2章では古代、中世、近代と時代ごとにわけ、調査を行う。

2-1. 古代 鉄の導入と伝播

鉄はいつごろから日本で使用されるようになったのだろうか？一説に日本における最初の鉄の導入は弥生期(BC300~)が起源とされる。それまで日本では石器と青銅器を併用していたが、鉄の導入により実用器が鉄製品に変化し、青銅器の祭祀品化が進みつつ併用されていたという。最初の製品輸入段階は中国東北部の中国の燕からの鑄鉄系鉄器(注1)が九州北部を中心とした地域に持ち込まれ、弥生前期から中期前半にかけてその輸入量は最大となった。しかしながらその多くはスクラップ品であり、弥生の人々は製品を削ったり磨いたりなどして、小型鉄器を作り小刀や古鉄斧、ヤリガンナといった道具として持っていたという。西日本においては鍛冶により鉄器を作る例もあったという。やがて三世紀以降になると朝鮮半島東南部から、炭素量が低い塊練鉄で作られた鉄素材が持ち込まれるようになった。さらに四世紀には日本において精錬鍛冶が始まり、塊練鉄そのものが輸入され九州から大和までの広い範囲で純度の高い鉄へと加工されていったとされている(藤尾 2004:6-8)。

このように弥生期では大陸部からの鉄の輸入が多くされ鍛冶が行なわれるようになったが、製鉄に関しては詳しい資料がない。古墳時代より開始されたとの見方もある一方、製鉄開始期を弥生期に求める見方もある(注5)。

そして本格的な製鉄が行なわれ始めたのは古墳時代からとされている。確実な製鉄遺跡は6世紀ごろから各地に現れ

ており、北九州では、製鉄遺跡群がみられ、6世紀には開始されていたとみられる一方、近畿においては鉄に経済を見いだしたと考えられる大集落があるという(森 1983: 33)。

では、何者により製鉄の技術が輸入され、製鉄が行なわれるようになったのだろうか？

窪田氏は鉄文化について「鉄およびその技術というものは当時の最高最新のものであって、決して個人的関係や部落的接近では摂取、移入できるものではなく、どうしても組織的・政治勢力がバックになるということである」(窪田 1975: 54)と述べている。鉄と権力が結びついていていたとしている。さらに朝廷は辰韓に遠征し、資源の調達のみならず、多くの工人を捕虜にしたという(窪田 1975: 74)。

鉄が権力と結びついていていたという考えはもっともである。しかしながら当時の大和朝廷に各地を勢力下に治める力が果たして実質的であったのだろうか？大和朝廷の力は北海道ではもちろん、東北、関東などの地域に行き届いていたのだろうか？さらに後世の製鉄に注目しても、鉄や職人はしばしば権力と結びついているが、全ての技術や工人集団が一つの権力の元におさまることはなかったはずである。こういった点を考慮すると大和朝廷の製鉄は近畿を中心に西日本を中心に行なわれていたのではないだろうか？

高橋氏は古代の製鉄炉に関しては様々な形状が見いだされている中で静岡以東の東国地方の製鉄炉「東炉」と中国・九州地方の製鉄炉「西炉」、そしてその他の炉を「東炉」「西炉」の発展形態とし、3種類に分類している(高橋 1983: 14)。高橋氏によれば「東炉」は半地下式の構造をした竪形炉をしている一方、「西炉」は長方形で箱形の炉である。例として「東炉」は大きさが少なくとも高さ 120cm 余りで炉床と呼ばれる底部は 75cm だった。岩盤に彫り込まれており、半地下の構造は煙突効果もあり、炉の機能と作業効率を確保することができた。さらに炉の後背部には吹子と呼ばれる送風装置を通すための羽口が一つ取り付けられていた。一方「西炉」は台地斜面に構築され、例として長辺 85cm、短辺 37cm であり、羽口の跡がいくつも残されていた」(高橋 1983: 14-20)(筆者抜粋、要約)という。

このように古代の炉の形状が東国と西国で全く異なっている事は注目に値する。高橋氏は「東炉」に西洋的、かつ原始的な形状を見だし東国独自に発生した炉である述べる一方、「西炉」と朝鮮半島との関連を指摘している。さらに平安期に至り「西炉」である長方形箱形炉が防湿施設、送風装置の増加など改良が重ねられていくことを明らかにし、たたらとの結びつきを示している(高橋 1983: 21)。古代製鉄と近世たたら製鉄を結ぶ中世の製鉄に関する文献資料が乏しい中、考古学的要素を利用したこの解釈は画期的といえるのではないか。

このように 2-1 では古代における鉄の起源に注目した。さらに何者が鉄を導入させたかについて調べた。ここでは西と東で炉の形が異なっているという点から地域ごとの差異を見いだすことができた。しかしながら鉄の普及の規模や製鉄職人や鍛冶職人らの姿を明確に見いだすことはできなかった。

ところでもう一つの側面を加えておく。それは日本が海に囲まれた国だということだ。さて海は日本と海外を遮る壁だったのか？いや、わたしはそうは思わない。海は日本と海外を結ぶ交通路だったのだ。古代では、「日本」の領土の確定さえ妖しいものである。宮本常一氏、網野善彦氏が述べるように、海を介した行き来はずっと柔軟に行なわれていたはずだ。その中に鉄を売る人、製鉄する職人がいたとしても何らおかしくはない。鉄の導入についてはもっと視野を拡大して考えることを提唱したい。



例えば、世界各地の人々と同様、アイヌの人々も鍛冶を行っていた。その絵が残されている。注目したいのは送風装置である吹子(ふいご)の形状である。この吹子(ふいご)はアザラシや魚の皮で出来ていたという。もちろんその形状、素材は本州では全く異なる。では、アイヌの技術はどこから伝えられたのだろうか？もちろん北方を考慮するのが適当である。しかしながら北方もまた海で隔てられているのである。この事実をどう解釈すればよいのだろうか？アイヌと北方の関係は鵜呑みにし、本州と例えば朝鮮半島とのつながりを考えないのか？朝鮮

図 2 革製吹子で鍛冶を行なうアイヌの人々 (石附 1983: 306)

半島と古代の日本を行き来したのはモノだけだったのだろうか？いや、ヒトと技術とモノは一緒に入ってきたに違いない。鉄の導入についてはもっと視野を拡大して考えたい。

2-2. 中世 遍歴する職人



第1図 乞食の生活（一遍聖絵）
（『日本常民生活絵引』 2より）

図3 乞食と鉄製炊事具(中央) (網野 1983:39)

2-1 では弥生時代に鉄が初めて導入された後に、古墳時代に製鉄が開始されたことがわかった。そして誰が生産をしていたかについて西と東という区分がなされることで為政者が複数いたことが考えられた。しかしながら職人の姿を見つけることはできなかった。そこで 2-2 では中世における鉄の普及の規模や製鉄職人や鍛冶職人らの姿を明らかにしたい。

まず中世において、鉄はどのような役割をもっていたのだろうか？まず日本中世において鉄がどの程度世間に普及していたかについて注目したい。例えば網野善彦氏によれば、1270年のある荘園の住人・名主クラスの人々の手に、鉄は鎌や鋤といった農具や斧・たつきといった山仕事の道具、鍋・釜・金輪といった炊事具が所持されていたという(図3)。また網野氏は『古今著聞集』、『一遍聖絵』といった文献や絵巻から山の民や遊女、乞食までもが釜や鉄鉢、金輪を所持していたことを明らかにし、さらに製塩のための鉄釜の需

要の可能性をあげている。鉄が生活用品となって庶民や貧しい者に広まっていった一方、銅の製品は寺院や貴族に装飾的で貴重なものとして扱われていたという(網野 1983: 38,39)。祭祀具に銅製品が用いられ、一般に普及している品に鉄製品が利用されていたという点は、史資料や東北タイでの発掘・民俗調査から判明する鉄と銅の利用状況からアンコール王朝においても同様だろう。

製鉄職人に関しては、文献資料の不足により、明らかでない点が多い。その中でも網野善彦氏は『今昔物語集』巻26-15話から”鉄を掘る者6(異論では60)人”の姿を見いだしている。「もとより、「職人」的な製鉄が行なわれなかったとは断定できないとしても、給免田畠を保証された「製鉄師」はいまのところ確認されていないのであり、中世において、こうした平民的な製鉄がなお大きな比重を占めていたことは、否定し難いのである。」(網野 1983: 36)というように、網野氏は、中世の史資料に鋳物師や鍛冶といった鉄を生産する職人を示す言葉がないことを述べている。さらに中世における「平民」的製鉄(網野 1983: 35)説を導き出し、中世後期にその平民的製鉄集団の中から製鉄の職人が生まれていったのではないかとしている。同じように高橋氏も平安期の製鉄遺跡が、集落に隣接しているという事実から、「工人は半農半鉄、つまり半農民的な感じを受けるのである。」(高橋 1983:25)としている。一方で「官的な性格を有していた時期には專業集団が存在したと想定できるのである。製鉄が民的経営へと移行するなかで製鉄集団は解体され、工人層が多様化されていったのであろう。」(高橋 1983: 25)として、国の力が強かった時代においては官営の製鉄集団があったとしている。

中世の製鉄・鍛冶職人については日本の研究においてもまだ議論の余地があることがわかった。ただし、平民が製鉄を行っていたとすれば、その専門知識をどこから手に入れたのであろうか？個人個人が行っていたとすれば、あまりにも効率が悪いのではないだろうか？そのため、わたしは高橋氏の説を支持する。



図4 鋳物師と鉄製品(網野 1983: 42)

さらに製鉄職人・鍛冶職人に対して、中世には遍歴する鋳物師(いもじ)と呼ばれる交易商人が活躍していた。背景としては、鎌倉から室町時代にかけて煮炊き道具として利用された釜といった鋳物の生産技術が発展したことや中世において鉄の需要が拡大したことにある。彼らは鋳物師の権威と伝統、特権が明示されている『鋳物師由来書』を創作し、大量の写しを作ることで、原料採集の自由や居住の自由を手にしていったという(窪田 1975:112,113)。網野氏によれば鋳物師は河内や和泉といっ

た鋳工の集住地を中心として全国に散一していたが、1165年に鉄及び鉄器物を扱う供御人組織を作った。また鋳物師は

特権を持った遍歴の「職人」だった。彼らは鉄器を貢進することで雑役や移動の際にかかる通行税を免除され、さらに天皇から官位を授かり蔵人所に直属していたといた。さらに鋳物師の中には単に鉄器物や原料鉄を商品として扱うだけでなく、実際に寺院の梵鐘や湯釜といった製品の鑄造に携わっている者もいたという(網野 1983: 41)(高橋 1983: 25)。鋳物師は自身の製品である鍋・釜(注)の他、鋤や鋏といった農具、加工前の原料鉄とみられる打鉄を扱っており、いわば何でも屋の風であったという(網野 1983: 41)。

このように **2-2** では中世における鉄利用や製鉄職人に注目した。ここでは鉄が民衆にまで普及していたことが判明した。製鉄・鍛冶職人に関しては「平民」的製鉄や專業集團の解体など、さまざまな論をすることができた。さらに中世の世間で鉄を流通させ時には製鉄自体も行なっていた鋳物師が、単なる権力者ではなく天皇直属の者として特権を与えられており、非農業民であった職能民と最高権力者との結びつきを明らかになった。

そして中世で特筆すべきは「遍歴」する職人の姿であった。「平民」的製鉄や專業集團が解体された末路にしろ、彼らは砂鉄や炭などの原料を求め、山中を歩き回り、製鉄を行ない、鉄製品を作ったのである。

2-3. 近世 たたら製鉄

2-3-1. 野だたら

近世の製鉄は何者によって行なわれていたのか？そしてその規模はどのようなものであったのだろうか？

近世に入っても中世の製鉄技術は依然として受け継がれていた。近世後期にたたら製鉄が主流になるのに対し、中世の技術を受け継いだ製鉄は「野だたら」と呼ばれる。その名前の通り露天で製鉄が行なわれ、原料として砂鉄が使用された。「鉄穴(かんな)流し」(注 6)と呼ばれる近世たたら製鉄において盛んになる砂鉄採取法も普及していた他、川砂鉄(川で採取される砂鉄)、海砂鉄(海で採取される砂鉄、塩分を含む)も多く利用されていたという。鉄の精錬大量の木炭が不可欠であり、炭材の豊富な山中に粘土の製鉄炉が作られた。炉は体系化が行なわれる近世後期のたたら製鉄とは異なり、寸法が一定ではないものの、縦 1.82m 横 0.9m 以内と小規模なものであり、構造も簡単なものであったという。炉への送風装置には踏吹子、吹差吹子が使用された(土井 1983: 75)。

「野だたらを行なう職人は、長である村下、炭を炉に入れる炭坂、炉に風を送る番子、その他の少人数で構成され、それぞれの役割を担っていた。炉が露天にあるため、降雨の少ない時期を選び(一般に夏季 100 ヲ日といわれたという)。一代(ひとよ)と呼ばれる一回の製鉄は 2 日ほどだったが、特に規定はなかった」(土井 1983: 76)(筆者抜粋、要約)。このように近世初期には小規模の製鉄集團が自ら組織されていたことがわかる。この様相は明らかに中世とは異なっているのだ。

さらに近世後期以降の山内と呼ばれた製鉄職人の集團組織に対し、野だたらに携わっていた職人の組織は当初、中世と同様に山中や川べり・海べりなどで砂鉄や炭を得ながら、山中を移動するような遍歴生活を行なっていたことが考えられる。彼らはその集團の規模からもわかる通り、山内に比べ閉鎖性が薄く、より生活にねざした製鉄を行なっていたはずなのだ。

一方で、これらの製鉄職人らは完全な自由を手に入れていたわけではなかった。ある意味土井氏によれば中世末以降の野だたらは大名による納物課役支配が行なわれるようになった。大名らはお抱えの製鉄業者を持ったり、鍛冶や刀工と共に製鉄職人をとり立て、職能的保障を与えたという。しかしながら近世初頭には幕府の力が増し、幕藩制的な生産体制への編成が行なわれていった(土井 1983: 72)。

2-3-2. たたら製鉄の発生

近世後期といえ、かの有名なたたら製鉄がある。まず文永年間(1264~75)に至り、中世から続いた野だたらが改良され、次第に炉の上に建屋、つまり小屋が造られるようになったという。そのため「100 日の照りを見て野炉をうつ」(窪田 1975: 263) (といったことはなくなり天候に左右されず常時操業することが可能になったという。



図 5 高殿たたらとケラ出し(河瀬 2004: 10)

さらに製鉄技術の発展の成果として、元禄・享保期において高殿たたら体制が確立された(土井 1983: 77)。高殿たたらとは屋内で吹子を用いて製鉄を行なうことを意味する。近世の製鉄がしばしば、たたら製鉄と称される理由も、吹子の改良が生産量と効率を高めたからだろう。この天秤吹子によって送風量が増え、炉の内部をより高い温度で燃焼することが可能になった。

近世以降の製鉄は中国地方を中心として行なわれていった。近世では製鉄に大量の砂鉄と木炭が要求された。そのため、原料調達に適した中国地方が選ばれたと考えられる。「砂鉄七里に炭三里」という言葉も残っており、これは材木が砂鉄に比べ運搬がしにくいという理由から、炭焼窯が製鉄炉に近接していたことを意味するものだった(高橋 1983: 11)。

さらに近世では製鉄炉の規模の拡大と地下構造の複雑化が見られた。製鉄は湿気を嫌う。そのため高殿の設置時期と同じく 17 世紀の後半には製

鉄炉の下部には防湿のために、床釣り施設が造られた。当初は本床(ほんどこ)、燃焼させる炭を投入させる小舟で構成された比較的簡単な構造が見られ、18 世紀中頃以降からは、本床、小舟の下にさらに保温・防湿のための施設を設けられるようになった。そして地下構造の拡大と共に、製鉄炉の規模も長さ 3m、幅 1m、高さ 1m ほどの大型のものになっていったという。(河瀬 2004: 11)。高殿建設工事費の半分は地下の土木工事にかけられ、労働人員は 1000 人をこしたという(窪田 1975: 274)。

このように近世には、高殿たたらへの導入、製鉄炉の拡大、地下構造の複雑化、製鉄炉の規模の大型化といった製鉄技術の発展があった。製鉄場の規模の拡大は鉄生産量を急増させたが、砂鉄や炭といった製鉄原料を大量に確保することが要求された。そのため製鉄原料の調達が容易である中国地方において、たたら製鉄が盛んになっていった。

2-3-3. たたら製鉄の工人集団と操業

たたら製鉄で注目すべきなのは、その技術だけではない。製鉄・鍛冶で生計を立てていた専門集団の姿がある。彼らは非農業民であり、作られた大規模集団だった。彼らは山中に隔離して住まい、農業民とは全く異なった生活を送っていたのである。

また山内の製鉄職人は独自の神をまつっていた。金子屋神と呼ばれる神は女性だったという。金子屋神は女性を嫌った。そのため、たたら場で製鉄を行なっている際は食事を運ぶ以外、女性が立ち入るのが禁止されていたという。「ものけ姫」では、たたらを踏むのは女性だった。しかし実際はとてもしついで労働であり全て男性だった。

山内の中のたたら場では、最高責任者である村下を頂点として、副技師長である炭坂、山全体の差配を行なう山配、吹子を踏む番子、雑用を任される小廻り、砂鉄を採取する鉄穴(かんな)師、炭焼をする山子とそれぞれ役割が分かれていたという。さらに製鉄炉から排出されたケラは鍛冶職人によって鍛えられ製品化されたという(窪田 2005:)。

たたら場において製鉄が行なわれることを操業といい、一度の操業は一代(ひとよ)と呼ばれ、3 日から 4 日、炎を絶やすことなく続けられた。近世の製鉄場は、原料となる砂鉄の収集を行なう「鉄穴流し(注 7)」から、天秤ふいご炉での鉄の精錬を経て、鉄を鍛え強度を高める「大鍛冶」、大鍛冶で鍛錬されたものを製品に作り上げる「小鍛冶」といった全ての行程が行なわれていた。鉄穴流しは砂鉄を含有する軟質花崗岩があり水の利が良い場所に、採取場を設けて行なわれた。砂鉄の採取期は 11 月初めから翌年の 3 月ころまでであったが、この時期はちょうど農閑期に当たり、農民が副収入を得るために労働者となっていたという(窪田 1975: 251-253)。

小結

第 2 章では古代、中世、近代と時代ごとに関し、調査を行った。2-1 では古代における鉄の起源に注目した。さらに何者が鉄を導入させたかについて調べた。ここでは西と東で炉の形が異なっているという点から地域ごとの差異を見いだすことができた。しかしながら鉄の普及の規模や製鉄職人や鍛冶職人らの姿を明確に見いだすことはできなかった。しかし

ながら海と日本の関係について論じることにした。2-2では中世における鉄利用や製鉄職人に注目した。ここでは鉄が民衆にまで普及していたことが判明した。製鉄・鍛冶職人に関しては「平民」的製鉄や専門集団の解体など、さまざまな論をすることができた。さらに中世の世間で鉄を流通させ時には製鉄自体も行っていた鋳物師が、単なる権力者ではなく天皇直属の者として特権を与えられており、非農業民であった職能民と最高権力者との結びつきを明らかになった。そして中世で特筆すべきは“遍歴”する職人の姿であった。彼らは砂鉄や炭などの原料を求め、山中を歩き回り、製鉄を行ない、鉄製品を作っていた。2-3では、近世たたら製鉄について調べた。ここでは、製鉄の炉の構造、製鉄技術、大規模な工人集団などさまざまな要素が明らかになった。

このように古代、中世、近代と時代ごとにおき、日本の鉄生産を調べた。第1章の小結で、わたしは「日本の鉄生産について調べることで王権(あるいはそれと同等の権力者)と職人、製鉄技術のモデルを得る」という目標を得た。ここでは日本の鉄生産についての調査の中で、天皇をはじめとした権力者と職人はどの時代も結びついていたことが判明した。一方でその伝播には地域性があった。さらに中世では遍歴を行なう製鉄職人の定住、農耕とは全く異なる暮らしぶりも明らかになった。

日本の鉄生産から非農業民である遍歴民の姿や権力者と職人の結びつきなど、アンコールと鉄の結びつきを今後考えていく上での多くのヒントを得ることができた。

3 王権と職人

3-1 聖と俗という視点から

第1章では、アンコールの鉄生産をテーマに、調査を行ない、アンコール王朝の新たな側面を導いた。第2章では日本の鉄生産を調べることで、アンコールの鉄生産の今後の調査のためのモデル作りを試みた。そしてこの第3章では最後に王権と職人との関係を新たな視点で考えていきたい。聖と俗の内包、おそらくあらゆる国でその両面を持った、あるいはそう認識されてきた人々が暮らしているだろう。おそらく彼らは多数と少数に分けられるならば、後者に属している。そして彼らは特殊な技能を持っている。彼らは例えば専門分野に長けた職人であり、芸人であり、あらゆる秘術をこなす呪術師などであり、農民とは立場を異にする存在なのである。

特に鍛冶職人はその技術の特殊さと製作される品の社会への有用性から、自身もまたその社会において農民とは一線を画した特殊な位置を占めてきた。



田村(1983)は、恩恵をもたらした鉄が、他方で卑しめられているという二律背反性を明らかにした。これは刀剣においても同様であり、大和神話でカミガミがこれを文化・自然両面に用いたことで、時に秩序が破壊され混乱がもたらされた一方、秩序をもたらすにいったという同じような二律背反性を示している(田村:1983)。

西アフリカの神話的世界においても、鍛冶職人には農耕に利用するための穀粒を人々にもたらした使者として、逆に創造神から穀粒を、火を得るためにノンモから太陽のかけらを奪ったオゴ(狐)としての「聖と俗」の二律背反の役割がある。

また神話に限らず実際の生活においても、西アフリカの鍛冶職人は両義的な面を持っていた。ウォルタ川流域のモシ族・ヤガンテ族は、政治的儀礼的役割を持ち、王、あるいは王の側近となる。一方、彼らは人々に死をもたらす暴力的な面を持ち合わせる。14世紀から19世紀にかけてのコンゴ古王国では、王国の設立者が鍛冶王として賞賛され、金属関係の仕事は王や貴族の特権とされたという。コンゴでも王国の設立は征服によってなされたのだから、暴力的な

図6 アフリカ東部の鍛冶(田村 1983: 250)

面を持ち合わせるという(田村:1983)。二律背反的役割にふれられていないにしろ、王と鍛冶職人の対等な関係は同じく西アフリカの北部モシ社会でも確認できるのである(川田:2002)。

日本においても、鍛冶職人は社会で特殊な位置にあったようだ。中世において、彼らは天皇から神人としての称号を受けていた。例えば鉄の生産、交易を行なう神人や鋳物師が船で国内外を遍歴していた。さらに鋳物師は蔵人所を介し、天皇に直接つながっていた。

このように製鉄職人は世界各地においてその特殊な技術により、他の民衆、特に農業民とは異なる立場にたっていた。彼らは国家の中でかなり特殊な位置を占めていた。例えば日本の製鉄職人の税を要求されず自由に遍歴を繰り返した姿、西アフリカの製鉄職人が王と同等の権力を持ち、「聖と俗」という2律背反の役割を担っていたことはそれまで想像されて来た被支配者層の姿とは全く異なるのである。

今後アンコールの王権と製鉄職人との関係をさぐっていくには、どのような観点をもつべきか。西アフリカの事例をふまえて、鉄が持つ「聖」と「俗」の部分に切り込んで行きたい。『真臘風土記』では、外出する際に身にはめこまれた王の「製鉄」と罪人の戒めのための鉄の枷があまりにも対称的である。さらに差別をされていたはずの山地民が王朝の鉄の生産者であることは、アンコール王朝の歴史を再構築するためにも重要な要素といえよう。

3-2. 漂泊する職人 彼らはどこにいくのか？

職人、職能民という存在についてもう少し考えていきたい。

職人、職能民といっても様々だ。その中で「非人」もまた一つの職業であった。網野善彦は非人について、その著書『異形の王権』において、「鎌倉後期から南北朝期にかけて「異類異形」といわれた人々をその実態に即してみるならば、決してこれを直ちに社会的に差別された人々とはいえず、むしろ恐れ、畏敬の目をもって見られる場合すら見出しうるのである。」(網野 1993: 23)や、「「異類異形」といわれた、悪党や山伏などの柿帷や蓑笠の姿が、非人の衣装に通ずるとともに、本来は神、聖なる人の姿だった」(網野 1993:24)などと論じている。ここでは神や聖なる者としての新たな非人の一面を示している。そして元々は一定の地位を得ていた非人が、天皇の権力が失われた南北朝時代を境に、「非差別民を一まとめとして「異類異形」ときめつける見方」(網野 1993: 35)が社会に広まっていったとしている。網野氏は聖なる者から卑賤な者に転化され、差別を受けていくという、これまでの常識を覆すような歴史観を提唱したのである。

さらに網野氏は別の著書において、遊女、白拍子、巫女、神人、供御人といった職能民が天皇に直属していたということも述べている。遊女、白拍子は時に自らを売る必要があり、後世には差別の対象だった。供御人の中には鋳物師もいた。差別を受けていたはずの人々が一転、もっとも頂点たる人と直接につながっていたという説はアンコールの王と民衆、アンコールの王と山地民との関係の再構築につながっていくのである。

「芸能、商業、技術そのものが境界的な性格を持つ行為とされ」、「こうした行為に携わる人びとが、境界に生きる人びとと、神仏と人間、聖と俗の境の人びとと考えられていたという社会的な状況、自然と人間の関わり方があったとみなくてはなりません。」(網野 1997: 30) (傍線筆者)は全てを物語っている。聖と俗の境の人びと、境界に生きる人びとに目をむけることは、これまでのアンコール王朝と農業民という一つのモデルを再構築する鍵となりうる。

最後にあなたはサンカをご存知だろうか？サンカ、ノアヒ、川原乞食、カハラモン、セブリの徒など様々な名で呼ばれた漂泊民は、戦後まもない頃まで各地で目撃されたという。彼らの生業は箕直し、箕作りといった竹細工、あるいは小法師、獅子といった遊芸職業、竿屋・研屋、占い業といった流浪職などであり、定住・農耕とは全く反する暮らしを行っていた。彼らの生活は主に山裾や川原に小屋、テントを建て行なわれる。そこで河川の魚を得、山で猟を行っていたという。さらにサンカの人々は古語とよく似た独自の言葉を話したという。そして彼らは上代の部民制の流れをくみ、様々な伝説を調査者に話したという。そのうちの一つに出雲伝承があり、「古くから砂鉄採取産業、鍛冶業がさかんであったヨナギ川流域において、神代から山の砂鉄をよないで剣、鋸(サンカではサンショと呼ばれた)を鍛造した」(田中:1987) (筆者抜粋、要約)と出雲一という人物が述べている。

伝説として話半分に聞いたとしても、サンカと鉄生産の関係は注目に値する。山地や川原を寝床とした彼らの生活を見ればその可能性は十分にある。もともと農耕民の流れを組んでいない彼らの一部が製鉄という職能を持っていたとしても何らおかしくはない。実際サンカ一派が、職業として鋸としての目立てなどと深くつながっていたことは事実であるとされる。第一、鋳物師や神人はどこに姿を消したのか？もともと遍歴の民である鋳物師は時代を重ね、一時期の力を失った後はごく自然に漂泊民として生きながら細々と生計を立てていったのではないだろうか？

かつて天皇に直属していた職能民の末裔だと考えるならば、つじつまはあう。しかしながら確かめる術はない。彼らは初めてその存在が明らかになって以来、姿を消してしまっているからである。それは独自の言語と文化、職能を持ちなが

らもクメール民族に徐々に同化されていった多くのアンコールの山地民に重なっていく。

サンカと呼ばれた漂泊民がいたという事実は文献、絵巻だけでない、非農耕民の人々の姿を現実のものとし、その後の天皇から將軍という為政者の変化にまつろわなかった人々の記録として貴重である。『真臘風土記』にもまつろわぬ人々が出て来たことを思いだしたい。そのためさらなる注意を向ける必要があるのである。

結論

本稿ではアンコール王朝と民衆の姿を新たに捉え直し、新たな歴史の再構築を行なうという目標にたち、論を進めている。そのため、わたしは鉄を材料として、「アンコールと鉄生産」を本題にすえた。

第1章では『真臘風土記』、『アンコール踏査行』、19、20世紀前半のフランス語文献、東北タイでの発掘・民俗調査事例といった史資料をもとに、アンコールと鉄の関係を探っていくという手法をとった。そのための課題としてはまず、「鉄がどの程度広まっていたか？」次に「誰が製鉄を行っていたか？」「さらに王と職人がどのような形で結びついていたか」というテーマを設定し、斧、鉄釘、王の「聖鉄」、囚人の枷など多岐にわたるアンコールの鉄利用、クイという製鉄職人の存在、山地民と職人の関係、東北タイなどの鉄の生産地が明らかになった。

第2章では工人集団、製鉄技術のモデルを得るという目標を掲げ、中世、近代と時代ごとに関し、日本の鉄生産を調べた。ここでは日本の鉄生産についての調査の中で、天皇をはじめとした権力者と職人はどの時代も結びついていたことが判明した。一方でその伝播には地域性があった。さらに中世では遍歴を行なう製鉄職人の定住、農耕とは全く異なる暮らしぶりも明らかになった。そして近世における非農業民である工人集団についても組織の内部や立場など後式を得ることができた。モデル作りにはより多くの時間を要するが、中世で遍歴を行っていた製鉄職人がいかに権力にとりこまれていったかは山地民クイと王朝の関係を考えていく上で大変面白いテーマである。交易人であり製鉄職人でもあった鋳物師の特権とその立場についても今後注目していきたい。また近世たたら製鉄技術で得た知識をアンコールにおける製鉄技術の理解につなげていくことができる。今後製鉄の発掘を行なうことで、それは生きてくるだろう。

第3章では製鉄職人の特殊性、境界を生きる人々としての職人、職能民に注目した。非人が「聖」から「賤」へと変わっていく背景や職能民の一部が天皇に直属していたことが明らかになった。また職能民の末裔とされるサンカと天皇の関係は山地民とアンコール王朝との関係を明らかにするために利用していけることが判明した。

アンコール王朝において、何が経済を支えていたのか？それは鉄であったことは間違いない。さらに史資料にあたったことで、わたしは一つの新たな歴史像を得た。それは職人など非農業民の視点から見るとアンコール王朝の姿だ。鉄を介した山地民とアンコール王朝の関係だった。アンコール王朝時代において、彼らは差別され、奴婢にされるものもいた。一方でまつろわぬ人々もいた。その中に鉄を生産するクイの姿がある。彼らはもともと山の中に住み、製鉄の原料を有利に得ることができた。つまり山地民という立場を逆に利用することで、アンコール王朝にとってなくてはならない存在になり得たのである。

繰り返す。王権と人々をつなぐものとして、鉄の利用があった。その鉄の生産者は非農業民だった。アンコールはそのような民衆によって支えられていたのだ。これまでのアンコールの歴史観に民衆の力という一つのアンチテーゼを投げ込み、本稿を締めくくる。

註：

1. 訳者は、周達観の記述が『誠齋雜記』からの引用ではないかと指摘している。また東南アジア方面に広く聖鉄信仰が行なわれたことも指摘している。(和田 1989: 136)。
2. 鍛造とは鉄の加工法の一つである。加工法は主に鑄造と鍛造に分けられる。その区別は製造方法と炭素量に基づいている。鑄造品は青銅製品と同じように型に流し込まれ加工されるが、鍛造品は工具で鍛えられることで成形される。鑄造品の炭素量が高いのにくらべ、鍛造品は低く強度においてまさっている。
3. Chong: ペリオの新訳では、現在トンレサップ湖西南側の山地に居住するチョン族の対音である(和田 1983)。チョンという呼び名は該当民族による自称であり、モン・クメール諸語系に属し、同じく山地民であるサオチ、パーと親縁関係にあるとされる(Lebar 1964: 159)。
4. 同書に引用されている Crendner (Crendner 1935a; 164)の主張によれば、クイはタイ族やクメール族が来た以前にその土地にいた古層民族である。農業の面においては多くのクイが定住水稲稲作に従事する一方、一部の人々は hoe agriculture を行なっている。同様に引用された Seidenfaden によればクイは象の狩猟と鍛冶を行っていた。
5. 窪田氏は製鉄の紀元を弥生期に設定している。弥生時代の製鉄技術は遺跡の確実な例がなく、断定ができないと述べるものの、漢代に比べ、素朴かつ少量生産が行なわれていたのではないかとしている。その鉄生産技術としては、河原や海岸近くの台地、あるいは山あいの沢のような場所で、燃料である薪の上に砂鉄を集積しその上にさらに薪を積み上げて何

日も燃やし続けるような原始製鉄のようなものではなかったかと指摘している(窪田 19883: 62)。

6. 主として利用される山砂鉄を得るために、糜爛花崗岩を崩し水路に流し、軽い土砂と砂鉄を分離させる方法。他にも中国地方では日野川・斐伊川での川砂鉄、江津海浜での海砂鉄の採集も行なわれていたという(窪田 2005: 250)。

文献目録

秋山高志・林英男・前村松夫・三浦圭一・森杉夫

1991 『図録・山漁村生活史事典』 柏書房

網野善彦

1983 「中世の鉄器生産と流通」『採鉱と冶金』 日本評論社: 29~67

1993 『異形の王権』 平凡社

1994 『中世を考える 職人と芸能』 吉川弘文館: 1~19

1996 『中世的世界とは何だろうか?』 朝日新聞社

1996 『日本中世に何が起きたか 都市と宗教と「資本主義」』

2001 『中世民衆の生業と技術』 東京大学出版会

2002 「生産と流通」『波講座 天皇と王権を考える 第3巻』 岩波書店

網野善彦／鶴見俊介

2004 『歴史の話』 朝日新聞社

石塚尊俊

1972 『鑪と鍛冶』 岩崎美術社

川田順造

2002 「職能民と王権—西アフリカの事例から」『天皇と王権を考える 3 生産と流通』 岩波書店: 168~172

窪田蔵郎

1975 『改訂 鉄の考古学』 雄山閣

周達観

1989 『真臘風土記』 和田久徳訳, 平凡社

田中勝也

1987 『サンカ研究』 新泉社

田村克己

1983 「第3章 金属文化の受容と展開 2 鉄の民族」『日本民族文化大系 3 稲と鉄』 小学館: 244

土井作治

1983 「近世たたら製鉄の技術」『採鉱と冶金』 日本評論社: 69~104

ドラボルト

1970 『アンコール踏査行』 三宅一郎訳, 平凡社

永原慶二・山口啓二

1983 「採鉱と冶金」『講座・日本技術の社会史』 第5巻 日本評論社

新田栄治

1996 『タイの製鉄・製塩に関する民俗考古学的研究』 鹿児島大学考古学研究室

2003 『メコン河をめぐる考古学-東北タイの鉄・塩・銅鼓』 上智大学公開講座資料

藤尾慎一郎

2004 「鉄」『歴博』 126号

宮本常一

1971 『宮本常一著作集 10 忘れられた日本人』 未来社

1976 『宮本常一著作集 21 庶民の発見』 未来社

森浩一

1983 「序章 稲と鉄の渡来をめぐって—民族文化の伝統を再評価する—」『日本民俗文化大系 3 稲と鉄』 小学館: 7~40

Boulangier,E

1880 『Un Hiver Au Cambodge』

Nitta,E.

1997 IRON-SMELTING AND SALT-MAKING INDUSTRIES IN NORTHEAST, THAILAND INDO-PACIFIC PREHISTORY BULLETIN 16, CHIANG MAI PAPERS, VOLUME 3